



Title	大阪方言話者による母音無声化 : その個人的特徴について
Author(s)	岡本, 耕介
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2005, 39, p. 37-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3916
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪方言話者による母音無声化

—その個人的特徴について—

岡本耕介

1 はじめに

1.1 背景

日本語では、音韻論的には母音があるはずのところでは声帯の振動が起らず、無声音として発音されることがある。この現象は母音の無声化としてよく知られている（以下、単に無声化ということがある）。

母音の無声化には地域差が存在することが知られており、大阪は「無声化の少ない地方」とされてきたが、大阪方言話者の母音の無声化は、話者によってその頻度に大きな差が存在することが指摘されている（藤本 2004）。また、大阪方言話者のなかには、無声化は行わないもの、無声化の有無を喉頭の積極的な制御によって決定してはいないと考えられる話者がいることが指摘されている（藤本 2003）。

したがって、大阪方言話者による母音の無声化は、個人的特徴が多彩であるとともに、必ずしも積極的に行う無声化ではないことから、言語内外の種々の条件の影響を受けて生起の仕方が変化しやすいことが予想される。本稿では、従来から広く行われているようなシンプルな読み上げ調査にとどまらず、さまざまな単語や発話の種類を設定し、さらにその結果を個人単位で観察することで、大阪方言話者による無声化の詳細な実態に迫ることを目指す。

なお、本稿では必要に応じて、無声化の観察対象とする母音を /-/ で、狭母音 /i, u/・広母音 /a, e, o/ をそれぞれ /V_N, V_W/ で、語構成上の境界を /-/ で、それぞれ表す。

1.2 無声化の生起条件

本来有声であるはずの母音が、声帯振動を失って無声音として発音される現象が母音の無声化である。

日本語において、一般に無声化が起こりやすいのは「無声子音間の狭母音」、および「無声子音に後続する文末の狭母音」である。前者の例としては「明日」/asita/ の /i/ や「鎖」/kusari/ の /u/、後者の例としては「です・ます」/desu, masu/ の /u/などを挙げることができる¹⁾。このような環境を「典型的無声化環境」、あるいは単に「無声化環境」と称することがある。本稿では、(典型的)無声化環境というとき特に前者を指すものとし、後者については考察の対象外とする。

2 調査

2.1 方法

8名の大坂方言話者に対して「地図説明」と「読み上げ」の2部からなる調査を行い、音声を収録した。具体的な調査対象事項については明かさず、「日本語の音に関する調査」という程度の大まかな説明のみを必要に応じて行った。所要時間は1名につき90分前後であり、話者1人当たりのべ1200~1300回程度の調査語の発話が得られる。

2.1.1 地図説明

店名や人名として調査語を埋め込んだ架空の地図を作成し、どこに何があるかの説明を求めた。この調査形態は、次のような利点のため採用した：

- 調査対象事項を悟られにくいことから発話の自発性・自然性を保ちや

すく、

- かつ設定した調査語が比較的短時間で確実に得られる
- 人名・店名を調査語に用いることで音環境・アクセントをコントロールしやすい2)

地図中の全ての人名・地名について説明がなされた時点で1回の説明を終了とし、2種類の地図で2回ずつ、計4回説明してもらった3)。

2.1.2 読み上げ

地図説明調査に続いて、地図説明を想定した文章を話者に読み上げてもらった。

文章は標準語のものと、それに対応する内容で方言色の強いもの(文体的にも異なる)の2種類を用意し、また2枚の地図に対応して2通りの内容を用意したため、計4種類である。また、標準語テキストの読み方は方言アクセントを用いるように指示し、通常の朗読のほか、「小声」や「一字一句をはっきり」など、複数種類の読み方で読んでもらった。また、最後に標準語として、可能な限り標準語のアクセントを用いての読み上げも依頼した。これらは文体や発話の種類が無声化に与える影響を考察するために行ったものであるが、今回は全ての発話を総合して考察対象とする4)。

なお、無声化位置における誤読や言い淀みが生じた場合は、当該部分の読み直しを求めた。

2.2 調査語の選定

無声化の生起率に影響を与える言語内の要因として、先行および後続する子音(藤本・桐谷 2003; 藪内 2001; 吉田 2002)、後続モーラの母音(藪内 2001; 吉田 2002)、無声化位置におけるアクセント核の有無(藤本・桐谷 2003; 藪内 2001)、無声化環境の連続(藪内 2001; Yoshida)、語構成(複合語の境界直前では無声化が減少する)(Yoshida)などが知られてい

表1：調査語一覧

		C ₂ , V							
		_kVw	_kVn	_sVw	_sVn	_tVw	_cVn	_hVw	_hVn
C ₁	k_	関川ビル	菊沢さん	木瀬川さん	楠本さん	北川さん	靴屋	沖原電器	木平理容
	s_	助川さん	スイミング スクール	裾野ハイツ	すし屋	レストラン	質屋 美容室	西浜塾	西平文具
	c_	近田薬局	月本さん	千坂雑貨	千島さん	ツタヤ	土田さん	松浜書店	ニッ藤 不動産
	h_	氷川酒店	福本さん 服屋	久本さん	ふすま屋	人見さん	湖上さん	日原 ペーカリー	ヒブミ マンション

特殊	無声化環境の連続	菊池外科	メキシコ料理店			
	無声化環境の連続+境界が後続	今福商店	大槻さん	さつき書店		
	境界が後続	空き地	鈴木工務店	手打ちそば	貸し倉庫	大西コーヒー
	促音が後続	喫茶店	ファーストキッチン			
	無声化位置にアクセント核	木谷さん	北さん	松本歯科	岸野さん	西原さん

る。これらを考慮し、表1に示す計51語を用意した。

2.3 収録

小型マイク SONY ECM-717 を話者の襟元に付けるか、傍らに置いて発話してもらい、DAT レコーダ SONY TCD-D100 に標準化周波数 44.1 kHz, 16bit 直線量子化で録音した。基本的に大阪大学言語文化研究科の収録室を使用して収録を行ったが、学外の収録室や、個人宅で行ったものもある(それぞれ1名ずつ)。

2.4 話者

表2：話者のプロフィール

ID	年齢	性別	職業	居住歴(年齢:場所)	母の生育地	父の生育地
A	26	女	学生 (兼・英会話講師)	～現在:大阪市 (1999年に半年間中国留学)	大阪市	大阪市
B	32	女	日本語教師	～現在:大阪市 (24～26歳:マレーシア)	滋賀県生・大阪府育	大阪府
C	20	女	学生	～現在:大阪市	三重県	岐阜県
D	25	男	SE・ プログラマー	～現在:大阪市	愛媛県生・ 広島県育 (20代から大阪)	大阪府
E	21	男	学生	生後数ヶ月:愛媛県松山市 ～現在:豊能郡	愛媛県	大阪府
F	25	男	学生	～21:吹田市 ～25:豊中市 ～生後すぐ:兵庫県伊丹市	大阪市東淀川区	名古屋市
G	23	男	学生	～8:箕面市 ～現在:豊能郡豊能町	和歌山県	和歌山県
H	19	男	学生	～現在:大阪市中央区	大阪市	大阪市

本研究の話者は、調査時（2004年）大学生～30代前半で、大阪市または北摂地域で生まれるか、生後すぐにそこへ移住し、少なくとも小学校卒業までその範囲内で育った人、8名とした。話者のプロフィールは表2の通りである。

3 分析

3.1 音声の取り込み

調査で収録した音声はデジタルオーディオインターフェース経由でPCに取り込むとともに、44.1 kHz から 22.05 kHz にダウンサンプリングした。そして、Microsoft Windows 上で動作する音声分析ソフトウェアを用いて調査語を切り出し、分析を行った。分析対象と認められたサンプルの総数は10321件である。

3.2 無声化の判定

音声の聴取と広帯域スペクトログラムの観察を同時に行い、無声化の有無を判定した。スペクトログラムの作成には、Praat⁵⁾ (version 4.0.50) を主に使用し、SIL Speech Analyzer⁶⁾ (version 1.5) も部分的に用いた。発話サンプルごとにスペクトログラムを観察し、母音相当部分（先行子音部と後続子音部の間）に声帯振動を示す「ボイスバー」が見られないものを無声、見られるものを有声とした。図1は、「……にはすし屋があって、」という発話における無声と有声のスペクトログラムの例である。

なお、無声化の判断が困難な発話も若干数見られ、212件について判断を保留した。したがって、調査語発話の有効総数は、 $10321 - 212 = 10109$ 件である。

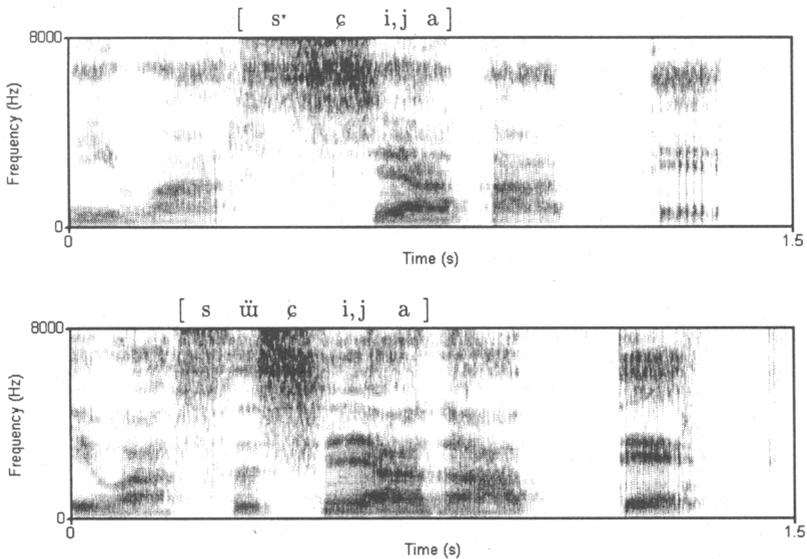


図1：スペクトログラムの例：「……には、すし屋があって」（上：無声、下：有声）

4 結果

4.1 音環境

4.1.1 音環境の分類

まず、32種類の音環境を無声化率によって分類する。2.2で設定した調査語のそれぞれについて、全員の発話における無声化率を集計した。ここでは境界や連続無声化環境などをもたない、基本的な環境をもつ調査語の結果のみを示す。/c.sVn/ の語である「千島さん」が実際には大多数の発話でアクセント核を持って頭高に読まれるなど、筆者の意図と異なる読み方が行われた単語もあるが、ここでは除外せず集計している。32種類の音環境を無声化率の高かった順に並べると、表3のようになる。

この32個の音環境の序列を四分位数で分割して8種類ずつを1グループ

表3：音環境と無声化率（無声化率順に並べ、4つに分割した）

環境①	s_kVw	s_cVw	c_kVw	c_kVw	c_tVw	s_tVw	s_kVw	k_tVw
	100% (124/124)	100% (491/491)	100% (140/140)	100% (114/114)	99.7% (298/299)	99.6% (234/235)	99.2% (131/132)	99.1% (115/116)
環境②	h_tVw	h_sVw	k_sVw	h_kVw	c_cVw	c_sVw	k_cVw	h_kVw
	98.5% (128/130)	97.8% (224/229)	97.8% (218/223)	97.2% (173/178)	92.6% (214/231)	90.8% (207/228)	86.5% (167/193)	82.6% (284/344)
環境③	k_kVw	k_sVw	k_kVw	h_cVw	h_sVw	s_sVw	s_sVw	c_sVw
	78.9% (101/128)	78.7% (174/221)	78.0% (160/205)	69.7% (225/323)	65.9% (143/217)	62.3% (154/247)	53.0% (62/117)	43.2% (98/227)
環境④	h_hVw	s_hVw	c_hVw	s_hVw	k_hVw	k_hVw	h_hVw	c_hVw
	13.0% (30/231)	11.0% (23/209)	10.8% (21/194)	8.1% (16/197)	8.0% (18/224)	7.3% (8/110)	4.3% (10/235)	2.3% (5/221)

とし、高率のものから順に環境①～④と呼ぶことにする。環境①は無声化率では99%以上で、ほぼ確実に無声化するといつてよい環境である。②は80～99%に相当し、①ほどではない（無声化しないこともある）が高率の環境といえる。一方④は無声化率13.0%以下で、無声化することが稀な環境といえる。また、この環境は /h/ 環境と一致する。③にはそれらの中間のものが属することになる。

4.1.2 個人的特徴

次に、分類したそれぞれの環境について話者個人単位での検討を行う。

8名の話者の環境①～④それぞれでの無声化率は、次の表4のようになった。図2は表4をグラフにしたものである。

環境①では当然ながら全員が100%かそれにごく近いため、今回の話者の間で個人差は見られないといつてよい。

表4：無声化率（個人・環境別）

	話者 A	話者 B	話者 C	話者 D	話者 E	話者 F	話者 G	話者 H
環境①	100% (237/237)	98.4% (180/183)	100% (204/204)	99.5% (215/216)	100% (206/206)	100% (205/205)	100% (198/198)	100% (202/202)
環境②	84.1% (175/208)	87.2% (163/187)	83.0% (166/200)	99.6% (229/230)	98.2% (222/226)	97.4% (224/230)	89.0% (210/236)	94.6% (226/239)
環境③	62.7% (136/217)	47.9% (80/167)	54.7% (116/212)	69.3% (147/212)	88.5% (192/217)	81.1% (180/222)	44.7% (97/217)	76.5% (169/221)
環境④	11.6% (23/198)	7.1% (12/170)	7.3% (15/205)	2.8% (6/218)	12.8% (25/195)	5.6% (12/213)	1.0% (2/207)	16.7% (36/215)
平均	66.4% (571/860)	61.5% (435/707)	61.0% (501/821)	68.2% (597/876)	76.4% (645/844)	71.4% (621/870)	59.1% (507/858)	72.2% (633/877)

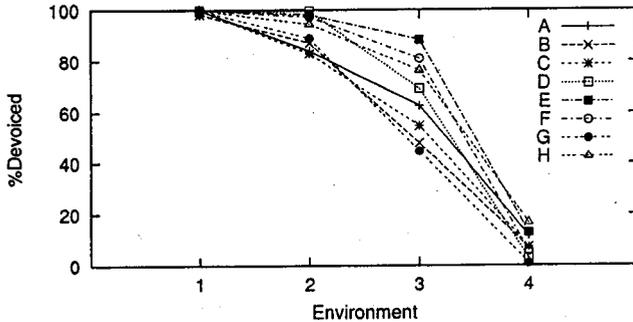


図2：無声化率（個人・環境別）

環境②においても8名全員が8割を超えているが、9割付近を境としてD・E・F・Hからなる上位のグループとA・B・C・Gからなる下位のグループに分かれているように見受けられる。この環境での2つのグループの差は0.1%水準で有意であった⁷⁾。

環境③では、B・D・Gの無声化率が大きく低下する一方で、9割近い無声化率を保つEのような話者もあり、全環境中で最も個人差の大きい環境となっている。この個人差の大きさが、この環境での無声化率を中間的なものにしてしている一つの原因と考えられる。

しかし、環境②に認められた2つのグループをまたぐ変化はなく、話者間の無声化率の高低関係はゆるやかに維持されているといえる（2つのグループの差は0.1%水準で依然有意であった）。③では話者AとDの動きがやや特殊であり、この2名以外について考えると2つのグループの存在はより明確となる。

環境③から④にかけてはグラフにもつれが見られる。話者A・Dの動きがグループをまたいで交差しており、Fも上位グループから大きく下がっている。上下の幅としては環境②と同程度である。

環境④とは /h/ 環境である。この環境は、母音の無声化だけでなく子音 /h/ の有声化も関わってくる点で他の環境と質的に異なると考えられ

る。

無声子音間での母音の無声化と有声母音間での子音 /h/ の有声化とは相反する関係にあり、一方が生起するともう一方はその生起に必要な音環境が失われて生起できなくなる。/h(V)/ 環境において母音が無声化しにくいことは、同じ環境で /h/ が有声化しやすいことと表裏の関係にあると考えられる。

/h/ の音質については今回分析できなかったが、母音の無声化の全体像を考える上では、今後分析が必要になるとと思われる。

4.2 特殊な調査語

次に、特殊な調査語（境界・促音・アクセント・連続無声化）について話者別の観察を行っていく。

4.2.1 境界を含む調査語

まず、語構成的な境界の位置における無声化率を話者ごとに求める。結果は表5のようになった。

ここでは、話者Gの無声化率が特異に低いことが注目される。特に調査語「大西コーヒー」においては際立った結果が得られている（表6）。

表5：語構成境界位置での無声化率

話者	無声化率
A	76.4% (68/89)
B	41.7% (35/84)
C	87.6% (78/89)
D	84.3% (97/115)
E	87.6% (99/113)
F	77.2% (88/114)
G	16.2% (18/111)
H	64.9% (74/114)
平均	67.2% (557/829)

表6：「大西コーヒー」における話者Gと他7名の比較

	大西コーヒー /s_kVw/	助川さん /s_kVw/
話者 G	3.9% (1/26)	100% (16/16)
他7名	97.3% (146/150)	100% (108/108)
平均	83.5% (147/176)	100% (124/124)

「大西コーヒー」の無声化率は全話者平均で $147/176=83.5\%$ であり、29件の有声発話があるが、話者Gにおいては $1/26=3.9\%$ であり、有声が25件である。つまり「大西コーヒー」における有声発話の大部分はGによるものなのである。しかし、「大西コーヒー」に対応する音環境でありかつアクセント核をもたない「助川さん」では、Gも他の話者と同じく全発話で無声化している。Gは境界の影響を非常に強く受ける話者といえる。

Gに次いで無声化率が低いのはBであり、次にH、さらにAおよびFと続いている。最高率はCおよびEであり、Dもそれにごく近い。

ここで特に低い無声化率を示した話者GやBは、4.1節での基本的環境の分析でもやはり低率であった話者である。しかし、ここで最高率を示した1人であるCは、4.1節では下位グループに属していた話者であるし、またHはここでは比較的低率であるが、4.1節では上位グループの話者であった。基本的環境での無声化率の高低と、境界位置での無声化率の高低は必ずしも一致するわけではないことがわかる。つまり、語構成的な条件が無声化に与える影響は一様でなく、話者によってその大きさが異なるものと思われる。

4.2.2 促音を含む調査語

無声化環境に促音が後続する語についても同様の方法で見えていくことにする(表7)。

ここでは話者Aの無声化率が最高となり、Aの次にはHが続いている。一方でB・C・F・Gは無声化が少なく、1割以下である。ここで注目されるのは、B・C・Gの3名は基本的環境(4.1節)でもやはり下位グループに属し、無声化の少ない話者であったのに対し、Fはむしろ相当無声化の多い話者であった点である。Fは、促音が後続する環境では無声化が特に強く抑制されることがわかる。逆にAは促音の影響が弱く、促音の前での無声化率が相対的に高くなっていると考えられる。

表7：促音前位置での無声化率

話者	無声化率
A	55.1% (27/49)
B	7.1% (3/42)
C	9.1% (4/44)
D	25.5% (12/47)
E	31.8% (14/44)
F	6.5% (3/46)
G	10.0% (4/40)
H	40.9% (18/44)
平均	23.9% (85/356)

表8：アクセント核位置での無声化率

話者	無声化率
A	75.7% (109/144)
B	65.8% (79/120)
C	66.7% (92/138)
D	66.4% (95/143)
E	77.9% (113/145)
F	73.6% (109/148)
G	67.3% (99/147)
H	76.7% (112/146)
平均	71.4% (808/1131)

ただし、今回の調査では促音を含む語は2語のみであったので、さらに細かく検証していく必要はあるだろう。

4.2.3 アクセント核をもつ調査語

無声化位置にアクセント核をもつ調査語についても同様に検討する(表8)。

ここでは全員が横並びに近く、話者ごとの特徴は見いだされにくい。これについては、今回用意したアクセント核をもつ調査語が、アクセントの問題以前に、音環境的にきわめて無声化しやすいもの(木谷さん・北さん・松本歯科：アクセント核を無視すれば音環境①に属する)であったり、その逆(西原さん：同じく④に属する)であったりして、アクセント核の影響が見えづらくなっている可能性もある。音環境的により整備された調査語を用いて、話者ごとの傾向について再検討する必要があるだろう。

4.2.4 連続無声化環境を含む調査語

連続する無声化環境における無声化パターンについても、話者一人一人の検討を行う。個人単位での無声化パターンは表9のようになった。ここでは無声を0、有声をVで表し、2つの母音の無声化の有無をハイフンでつないで示した。数値は、パターンの出現頻度を話者ごとの百分率で示し

表9：連続無声化語の無声化パターン

菊池外科					
	o-o	o-v	v-o	v-v	計
A	11.8	76.5		11.8	100 (17)
B		54.5		45.5	100 (11)
C		78.6		21.4	100 (14)
D	13.3	86.7			100 (15)
E	71.4	21.4	7.1		100 (14)
F	7.7	92.3			100 (13)
G		46.7		53.3	100 (15)
H		57.1		42.9	100 (14)
平均	13.3	64.6	0.9	21.2	100 (113)

今福商店					
	o-o	o-v	v-o	v-v	計
A	8.0	8.0	16.0	68.0	100 (25)
B		81.3		18.8	100 (16)
C		66.7		33.3	100 (27)
D	44.0	16.0	4.0	36.0	100 (25)
E	51.9	37.0	7.4	3.7	100 (27)
F	6.7	86.7		6.7	100 (30)
G		59.4	3.1	37.5	100 (32)
H	6.7	26.7		66.7	100 (30)
平均	14.6	47.2	3.8	34.4	100 (212)

大槻さん					
	o-o	o-v	v-o	v-v	計
A	95.7	4.3			100 (47)
B		89.2		10.8	100 (37)
C		69.2		30.8	100 (39)
D	80.0	12.5	5.0	2.5	100 (40)
E	67.5	32.5			100 (40)
F	29.3	68.3		2.4	100 (41)
G		25.0	22.5	52.5	100 (40)
H	8.1	54.1		37.8	100 (37)
平均	37.1	43.0	3.4	16.5	100 (321)

メキシコ料理店					
	o-o	o-v	v-o	v-v	計
A	100				100 (40)
B			96.2	3.8	100 (26)
C			100		100 (28)
D	66.7		33.3		100 (30)
E	56.7		43.3		100 (30)
F	16.7		83.3		100 (30)
G	3.2		96.8		100 (31)
H	8.8		91.2		100 (34)
平均	34.5		65.1	0.4	100 (249)

さつき書店					
	o-o	o-v	v-o	v-v	計
A	93.3			6.7	100 (15)
B	6.7	80.0		13.3	100 (15)
C		100			100 (14)
D	39.3	50.0	7.1	3.6	100 (28)
E	13.8	86.2			100 (29)
F	10.7	82.1		7.1	100 (28)
G		89.3		10.7	100 (28)
H		92.9		7.1	100 (28)
平均	17.8	75.1	1.1	5.9	100 (185)

たものである⁸⁾。また括弧で囲んだ数値は実際の度数である。

全体の傾向としては、次のような点を指摘できる：

- いずれの調査語も、一方だけを無声化してもう一方を有声に残すパターン (o-v あるいは v-o) が最多 (表中太字) で、無声化が連続することとは比較的少ない
- 無声化の有無を入れ替えたパターン (o-v が多い語に対して v-o、v-o

が多い語に対して o-v) はきわめて起こりにくい

このように全体としての傾向が存在する一方で、同時に話者個別の特徴も見られる。特に、連続無声化 (o-o) の生起頻度に関して話者Aは特異であり、「メキシコ料理店」では全ての発話が連続無声化であるほか、「大槻さん」「さつき書店」も大多数 (それぞれ 45/47、14/15) で連続無声化を起こしている。話者DやEも比較的高頻度に連続無声化が起こるが、o-v や v-o のパターンが少なからず共起している場合が多い。

一方、話者B・C・Gでは連続無声化は皆無に近く、BとGにわずかに1例ずつ見られるのみである。先ほども述べたように、この3名は全員4.1節の分析でも下位グループに属した話者であり、単独の無声化環境で無声化の少ない話者は連続無声化の生起率も低い傾向はあるようである。しかし、4.1節では下位グループに属しながら連続無声化が非常に多いAのような話者や、逆に上位グループに属しながら連続無声化がほとんど見られないHのような話者も存在する。また、FもHに似た傾向を示している。したがって、基本的環境での無声化の頻度と、連続無声化の頻度との関係は、ゆるやかには見られるものの、決定的ではないといえるだろう。

また、どの調査語で連続無声化が多くなるかについても話者ごとのばらつきが見られる。連続無声化の頻度がきわめて高い話者Aにあっても、「菊池外科」では連続無声化を避けた o-v が主流であるし、「今福商店」では揺れを見せながらも無声化を一切行わない v-v が最多となっている。これらの語においても話者DやEでは少なからず連続無声化が起こっている (Eは2語とも連続無声化の発話が最多。Dは「菊池外科」では少ないが「今福商店」では最多) ことから、これらの語が全ての話者にとって連続無声化の起こりにくい語であるとも言えないようである。

つまり、「連続無声化を回避したときに起こる無声化パターンにはある傾向が存在するが、そもそも連続無声化がどのような環境でどの程度起こる

かに関しては個人差が大きく、話者間で必ずしも一致しない」ことがわかる。今後、音環境や発話回数をさらに増やしての調査が必要と思われる。

4.2.5 考察

無声化の生起率に関与する要因は多岐にわたることが知られているが、個々の話者がそれらの要因からどの程度影響を受けるかも、話者ごとに、要因ごとにそれぞれ異なっていることがわかる。大まかに言って、基本的環境で無声化の少ない話者は、特殊な条件下でも無声化が比較的少ないなどの傾向は当然見られるのであるが、それだけでは説明のつかない、話者ごとに固有のふるまいも随所に現れている。個々人の無声化環境への対処方策は、単に無声化を頻繁に行う、あるいはあまり行わない、という1次元的な問題ではなく、複数の個人内的なパラメータの関与のもとに決定されていると考えられる。

5 結論・今後の課題

調査結果の分析を通して、以下のことを述べた。

まず、いわゆる無声化環境の中に、全ての話者でほぼ確実に無声化する環境や、逆に無声化が非常に起こりにくい環境が存在すること、さらにその中間といえる環境が存在することを確認した。

そして、中間の環境では話者間の個人差も顕著に現れ、そのことが全員で平均したときに中間的な無声化率を呈する一因になっていると考えられた。

また、無声化に関する個人差は、必ずしも単純に「無声化の多い話者」あるいは「少ない話者」という尺度のみで表せるものではなく、音声・音韻や語構成などの面での特殊な条件（無声化環境の連続や語構成的境界など）の存在下では、各話者がそれぞれの条件の影響を異なる程度に受け、より複雑な実態を出現させることを示した。今回見られた多彩な個人的特

徴が他の何らかの音響的・調音的な個人的特徴と関連するか、また方言による差は存在するか、など、さらに追究の余地があると思われる。

また、今回行った調査では、単語の種類や発話回数などの点で必ずしも十分とはいいがたい面もある。質・量ともにより充実した調査を行い、その結果に基づいたさらに詳細な議論が行われることが望ましい。

謝辞

本研究を行うにあたり、根気強く指導して下さった土岐哲先生をはじめとする日本語学講座の先生方、またデータを提供して下さった話者の方々に、心から感謝いたします。

注

- 1) ただし、文末の「です・ます」を無声化しない発話は少なからず行われている。文末の無声化の有無は、文体や態度などのパラ言語的表現に関わる面が多分にあると思われる。
- 2) 人名は、音環境の要求に応じて比較的自由に選択、もしくは作り出すことができる。また、「酒店」「理容」などを後接することで、アクセント核を移動させることができる。
- 3) ただし、話者Bに関しては時間の都合上、1回ずつ、計2回となった。
- 4) 岡本(2005)では発話の種類に関する考察も行っている。
- 5) <http://www.praat.org/>
- 6) <http://www.sil.org/computing/speechtools/speechanalyzer.htm>
- 7) 統計的検定には、「比率の差の検定」(両側)に「イエーツの連続性補正」を適用したものをを用いている。
- 8) 丸め誤差のため、表に示した比率の和は必ずしもちょうど100にはならない。

参考文献

- 市川熹・堀内靖雄・土屋俊(2000)「日本語地図課題対話コーパス」『音声研究』第4巻第2号 日本音声学会
- 岡本耕介(2005)「大阪方言話者による母音無声化——自発発話と読み上げとの比較を通して——」大阪大学大学院文学研究科修士論文

- 杉藤美代子 (1969) 「東京大阪における無声母音について」『日本語音声の研究 3 日本語の音』和泉書院 (1996)
- 藤本雅子 (2003) 「大阪方言話者における母音無声化時の喉頭調節」第17回日本音声学会全国大会予稿集
- (2004) 「母音長と母音の無声化の関係——東京方言話者と大阪方言話者の比較——」『国語学』第55巻1号 日本語学会
- 藤本雅子・桐谷滋 (2003) 「東京方言と近畿方言における母音の無声化の比較」『音声研究』第7巻第1号 日本音声学会
- 前川喜久雄 (1989) 「母音の無声化」杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育 第2巻 日本語の音声・音韻 (上)』明治書院
- Maekawa, Kikuo and Kikuchi, Hideaki. (2002) “Corpus-Based Analysis of Vowel Devoicing in Spontaneous Japanese—An Interim Report—” Voicing in Japanese, The Leiden Centre for Linguistics, <http://www.let.leidenuniv.nl/ulcl/faculty/vdweijer/jvoice/>
- 藪内智 (2001) 「日本語母音の無声化に関する考察——sonority index を用いた記述の可能性——」『言語文化共同研究プロジェクト2000 日本語音声の研究——無声母音をめぐって——』大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科
- 吉田夏也 (2002) 「音声環境が母音の無声化に与える影響について」『国語学』第53巻3号 国語学会
- Yoshida, Natsuya “Some Factors concerning Vowel Devoicing: Consecutive Vowel Devoicing and Morpheme/Word Boundary” Voicing in Japanese, The Leiden Centre for Linguistics, <http://www.let.leidenuniv.nl/ulcl/faculty/vdweijer/jvoice/>

(大学院前期課程修了生)

SUMMARY

**Vowel Devoicing of Osaka Dialect Speakers:
On Its Individual Characteristics**

Kōsuke OKAMOTO

This paper discusses individual characteristics in vowel devoicing of Osaka dialect speakers.

It is well-known that close vowels /i, u/ between voiceless consonants are often devoiced in Japanese. It is also known that many kinds of linguistic conditions, such as the kind of adjacent voiceless consonants, or presence of accent nucleus in a word, can influence the occurrence of Japanese vowel devoicing. Besides, a recent study has pointed out that the frequency of Osaka dialect speakers' vowel devoicing varies largely from speaker to speaker.

In this paper, more details on variation in Osaka dialect speakers' vowel devoicing are investigated. 8 Osaka dialect speakers produced utterances including devoiceable words in spontaneous speech and when reading scripts. As a result of analyses it is suggested that not only the overall frequency of vowel devoicing but also the degree that each phonetic and/or morphological condition influences on vowel devoicing varies from speaker to speaker. That is, it is possible that a speaker devoices vowels very often in one condition, but rarely in another.

Therefore, individualities on vowel devoicing can not always regarded as a 1-dimensional feature: they are rather considered to be determined under influence of multiple speaker-internal parameters.

キーワード：母音の無声化，大阪方言，個人的特徴